

鈴木鎮一著「音楽に感動する感覚」 Suzuki Method, 才能教育 No177, 秋 2011

才能教育研究会 2011 年 9 月 15 日刊を読む

音楽に感動する感覚

1. 音楽は、作曲者の人間としての全感覚がそれぞれの能力において書かれている。私どもはバッハの音楽を聴いて、音の世界でバッハの人間像を感得させられる人間となってゆく。バッハを感じる能力が自分の中に育ってゆくのだ。
 2. モーツァルトを聴いて、モーツァルトの美しい心の天国を、私どもは自分の中に感動として受けとり、その感覚を育てられてゆく。ベートーヴェンにしてもそうである。まだ逢ったこともない歴史の中の人物でありながら、今日相知る人々からうける人間の姿、心、その生きている心と同じように私どもの中には、バッハやベートーヴェン達が生きているのである。
 3. その性格も、その心も、まざまざと私どもの感覚の中に生きている人々である。
 4. ナポレオンの話をどれほど聞いても、私にとってナポレオンは死んだ歴史の中の人であり、その生きたナポレオンは私どもには感覚として少しも残らない。知識としてのナポレオンだけである。音楽に残されたその作品を聴いている時、または自分で演奏している時には、バッハなりベートーヴェンなりが自分の中に生きて、その全人格をもって私に話しかけて来る。こんなにまざまざとした人間の感覚の世界は、あるいは他にはないかも知れない。
 5. 偉大な人々の音楽を聴き感動するたびに、私どもは自分の中に、自分の人間の価値を高められてゆくように感じる。初めは何の感動もなかった自分が、だんだんにゆり動かされてゆくようになるのは、偉大な人々の高い感覚が私どもの感覚として、わずかながらその積み重ねがなされるわけで、聴けば聴くほど、だんだんに作曲者の人間像は偉大となってゆくのである。
 6. 音楽はわからぬ、と言う人が多い。聴かない人々にわかるわけがなく、同じ曲を50回100回と聴くことによって自分の中に力が育ち、感動が始まるのだ。いろいろな曲を 1 回や 2 回ずつ聴いてみただけでは、わかるもわからないもない。外国人は日本語を 2、3 回聞いただけでは、日本語はさっぱりわからぬだろう。
-
1. 音楽を文字文化に翻訳しようとする人々は無理なことをやっているのである。ベートーヴェンの「月光」の曲を聴いて、月夜の景色を思い浮かべて、それでこの曲はよくわかった、と思う人々は一番わからぬ人々であろう。

8. 自分の中に音楽の感覚を育てられた人々だけが、感覚で音楽を感じてゆくのだ。その感覚は音楽をよく聴く以外に方法はないわけである。
9. バッハに感動出来る能力に自分が高められた時、ベートーヴェンにも感動が出来る自分になっていることに気がつくだろう。
10. 音楽は万国共通の言葉であるからである。

P6 ～ 7

[コメント]

鈴木先生の音楽についての考えほど心を打つものはない。一語一語かみしめたい。

－ 2011 年 9 月 28 日 林 明夫記 －